

昭和33年7月1日第3種郵便物認可
平成16年9月5日発行(毎月5日1回発行)
第11巻9月号(通巻512号)

風土

9



雲の峰

神蔵

器

足早に桂郎過ぎて田水沸く
吊忍一つが売れて風分つ
葎切やくらら先生往診す
裏街の冷房の縞渡り行く
迎火送火多勢に焚きて一人かな

芋殻折るより衣擦れの音かすか
ひつつみといふすいとんや敗戦日
信州にそばの「刀屋」木槿咲く
大東京のビル沈黙す雲の峰
竹巻きて蛇の全長冷ゆるかな
夕立の二階へ上る素足かな
振つて鳴らす明珍火箸夜の秋



竹間集

同人作品



さくらんぼ

門伝 史会

ぴんと立つ軸よりつまむさくらんぼ
梅漬けて明日のことは考へず
母の忌の梅雨満月となりにけり
武蔵野を残す駅前梅雨晴間
老鶯や国木田独歩文学碑
入水せしあたり覆へる茂りかな
三鷹神社等
桜桃忌赤松の幹やに垂れ

「櫛」以後（四十七）

野沢しの武

種牛の目に元日の雪降る木
硝子戸を一禽よぎる七種粥
人日を賀状の整理なるもして
まだ父の齢に足らず竜の玉
冬銀河寡黙な父として逝きき
山に根雪父と出湯に浸りしこと
綿虫やこころ弱れば父憶ひ

草茂る

鈴木 石花

とびとびの羅漢の山を登りけり
時鳥秩父連峰真向ひに
草茂る奥より阿羅漢さまの声
少林山羅漢五百の貌涼し
彫り歪む痛恨の碑や反魂草
原爆描く丸木美術館出て暑し
紫陽花や出演近き爪磨く

湖 国 所 所

— 小野寺 節子 —

平成のしぐれを被る四足門
惣村古文書十一月のふところに
羽衣掛の柳に涙しぐれかな
木の実落つ音をうしろに世代閣
ただならぬ罷り出でたり雪婆
七本槍の山は眠りに就きにけり
鳩啼くをひねもすあやす観世音
観音と暮す里人蕪引く
「糸引き唄」歌ひ忘れて春遠し
琴糸の里の熟寝や明日の春

茅 葺 の 在 原 集 落 春 遅 し
業 平 の 宝 筐 印 塔 春 料 峭
業 平 の 花 鳥 い づ こ 隠 れ 里
神 々 の も た ら す 田 打 桜 かな
雀 の 子 人 の 子 ど こ に 出 て お い で
業 平 の 火 と な る 墓 の 雪 椿
花 見 鳥 啼 か ず 業 平 淋 し か ろ
業 平 の 墓 の 料 峭 く る ぶ し に
見 返 り の 桜 に あ ま た 仏 の 目
花 を 追 ひ 見 返 り 桜 に あ や か り ぬ

山河集

同人作品



神蔵器選

子を抱きて待つ救急車五月闇
梅雨入りや入院支度の玩具選る
短夜の小児病棟面会簿
「飲食厳禁生花厳禁」虎が雨
合歓咲けり病院食の白き粥

中嶋陽子

紺碧の海より抜きし鯉かな
立石寺仰ぐ辺りに合歓の花
水軍の榮えし島も麥の秋
軽装にてホテル出発朝曇
夏の夜や空席もなきカフェテラス
浴衣着てぎこちなき日となりにけり
竹皮を散らしてをりぬ裏の木戸
妻ひとり道掃きてをり朝曇

遠藤道遙子

保田英太郎

雨足を僧の見つめし合歓の花
そら豆の塩ゆでを待ち指たたく

近藤幸三郎

噴水を濡らして朝の雨上がる
リズム良き鑿の音や桐に花
通夜の客ひとり残りし竹の秋
日雀啼く郡上に買ひし竹の籠
紫陽花咲く三浦は媛の入水の地
朝曇搾乳終へし積荷出づ
放牧の牛の四五頭雷兆す
老鶯や山へ消えゆく牧の柵
万緑の道のひとつはいくさ道
草茂る山に大学運動場

布施まこと

風土独語／神蔵 器



奈良薬師寺の西塔は、昭和五六年に完成し、四五〇年ぶりに東西の塔が揃った。東塔は高さ三四メートル（全長二七九メートル）。新しい西塔は東塔より塔身で三三センチ、基壇で八十センチ東塔よりも高く設計されている。これは、木造の塔は時間とともに乾燥し縮んでゆく、また基壇は塔の重み六八〇トンによって沈下する。両塔の高さが揃うのは約二百年後という。

木造による建物の乾燥、重みによる基壇の沈下はよく理解されるが、西塔は三重塔でも各階装階（しほ）がついているので、六重塔のように見える大きな建物である。各部分の乾燥の仕方でも違えば縮み方も異なり、また沈下も新しい年ほど大きく、年代と共に少なくなつてゆくであろう。精巧な電子計算機のようなものがあるにしても、最後の極め手は宮大工（西塔の場合は西岡常一）の経験と緻密な感覚の判断によるものであろう。かえりみて、誰が百年、二百年の後まで考えて今日の俳句を作っているだろうか。

「飲食厳禁生花厳禁」 虎が雨

中島 陽子

子供の病気は、たった今二元気で走り回っていたのに、急に高熱を出し引き付けをおこしたりする。陽子さんのお子さんは私の孫の志織より一年下の小学校 一年生。このたび突然緊急入院の事態になった。食べ物はもちろん、生花の匂いまで遠ざけるとい

であるから容易ならぬ重態のようである。

虎が雨は、陰暦五月二十八日に降る雨で、この日は曾我兄弟の討たれた日で、十郎祐成の愛人、大磯の遊女虎御前の涙が雨になったという言い伝えである。俗説ではあるが、日本人好みというか何となく説得力のある話である。

ところでお子さんの病気と「虎が雨」は本来何の関係もない。しかし「飲食厳禁生花厳禁」で一休止、つまり厳禁の「禁」も切字である。ここで大きく切れて一呼吸し、一定の断層を置いて「虎が雨」につながる。

事実と事実がぶつかつても何も生まれませんが、そこに微妙な差が生まれれば、その微妙な差が個性であり、新しさであり、その作品だけの世界を生み出すものである。読者はたとえ錯覚だと思つても、微妙な差に共鳴し十分納得して感動する。

紺碧の海より抜きし鯉かな

遠藤逍遙子

かつおの一本釣である。「海より抜きし」は、大きなかつおが海より釣り上げられる一瞬をとらえて見事、豪快である。

蛇足を言えば、鯉は死んだ餌にはつかないから、魚群に会えばマイワシ、カタクチイワシなどを撒き餌にし、船べりに備えた蛇口から水をシャワーのように海面に浴びせたりして鯉を集める。はじめは生き餌をつけるが、食いが立ってきたら擬似針を使う。擬似針には「返し」が無いから釣り日げた鯉は頭上近くで針が自然にはずれる。そして一瞬を争って次々と釣り上げる。鯉漁の男の勝負どころである。

浴衣着てごちなき日となりにけり

保田英太郎

本来浴衣はくつろいで着る夏の家庭着である。従つてのんびりとくつろいだ気分というのが普通であるが、作者は浴衣を着せられて、何となく落ち着けず自分自身も普段と違つたごちなさを感じている。というのも多分体調を崩して、奥様から浴衣を着せられ、外出も止められて一日家に籠ることになつたのである。如何にも英太郎さんらしい軽いスナップの効いた句である。句会の当日は欠席投句であつたが、作者名が発表され保田英太郎さんと分かると一緒に拍手が上がつた。

朝曇搾乳終へし積荷出づ

布施まさ子

搾乳は早朝の仕事である。現在ではすべて搾乳機を用いているので、搾乳の間も大分はぶけている。

私の生家では戦後養蚕に代わつて乳牛を飼つた。その頃は胸を患つて病床にあつたので、兄は「マサ（私）に飲ませるため」と言つていた。わずか五、六頭の乳牛であつたが、兄夫婦では大変なことであつた。しぼつた牛乳は牛乳缶に移し、都道の集荷場まで車で運んで、朝の仕事は一段落である。

後に病気がよくなつて、兄から一緒に乳牛をやろう」と言われたが、私は断つてしまった。それから私は東京へ出たが、いつの間にか生家に乳牛は一頭もいなくなつた。

四捨五人出来ぬ来し方蚯蚓鳴く

天野みゆき

蚯蚓は夏の季語であるが、鳴かない蚯蚓も「蚯蚓鳴く」は立派な秋の季語である。自分の過ごしてきた過去、来し方はやり直しができない、そして寸毫も変更、四捨五人もできないものである。鳴かない蚯蚓を鳴かせるのも俳句なら、作者の言葉にならない無言の思いを語らしめるのも俳句の魅力であろう。

菱採りの小舟も入れて沼を描く

三浦 てる

川合玉堂の絵を見るようである。中でも野間コレクションで見た昭和三年作の「芦間之舟」を思い出しているが、掲出句も菱採りの小舟によって広い沼にポイントが生まれ、小舟のポイントによって沼全体があらためて見えて来る。素敵な絵が出来上がったことであろう。行人抄に採つた。

絵タイルの魚が逃げ出す大夕立

の「魚が逃げ出す」は大夕立の中での活写、見事である。

口紅でかかれし伝言蟻地獄

松崎 雨休

口紅でかかれた伝言は吉か凶か。生涯で一度でいいからこうした伝言を受けてみたいと思う。しかし蟻地獄の季語が不気味である。

ともあれ、重役の椅子を辞して、植木職人になつてしまつた雨休さんは、雨の日は植木職人は休むというので「雨休」という俳号をつけたという。悠々自適な生活、そんな雨休さんの過去をちよつぱり覗いたような気がした。

風土集



神蔵 器選

香水を替へて一と日の落着かず
川崎 中村 洋子

武相 莊より白日傘夏帽子
青柿にすでに富有の貌のあり

十葉の八重の盛りに日照雨過ぐ
走り梅雨引き戸半ばに引つかかる

色紙に嬰子の手型星まつり
横須賀 三浦 てる

糠床に糠炒つて足す走り梅雨
絵タイルの魚が逃げ出す大夕立

みちのくの朝市瓶の大蝮
姉がゐて妹がゐて茄子の花

試歩の夫飛燕の天を賜れり
東京 山本 令夏

蛭川ざぶざぶ渡る手を引かれ
虹二重大菩薩嶺より立てり

梅雨の雷妻の眉もて針使ふ
梅雨滂沱厨に納豆練りてをり

玉川上水

死後に咲く花屋顔の二つ三つ
三鷹 布施まさ子

姉の忌のすこし巻き上ぐ青簾

白足袋の僧ゆく卯の花腐しかな
一団となりて布教や白日傘

漁師町軒の高さに立葵
藤枝

風邪なほす薬は仕事若葉風
コインランドリー探す町かな大南風
藤枝 柿沼 盟子

霧吹きて休まず衣裳麦の秋
稽古場の外階段や合歡の花

応援のダンスの練習立葵
登り切る駅の階段雲の峰
川崎 佐野つたえ

イギリスの旅

湧き水の村中巡り半夏生
中世の石壁つたひ薔薇咲けり